

環境の復元を行った。かつての多摩川は大きく蛇行した流路を形成し、氾濫原である川岸は砂礫地・荒地・葦の群生地となっている。氾濫原周辺には広大な水田が広がり、狭小な河谷も谷戸田として用いられている。河谷は古代も水田に利用されたほか、大部分が低湿地であったと考えられる。一方で、台地や丘陵上は水に乏しいローム地質であるため畑として利用され、また大部分は山林であった。これらのことから、横穴墓は低湿地や水田を見下ろす斜面地に造営されたと想定される。

また、傾斜による分析では角度と方位の二観点から分析を行った。造営地の傾斜角度グラフからは、右岸では12度〜21度を中心とする山形分布を示す一方、左岸では0度〜3度の傾斜に位置する横穴墓が最も多いことが分かった。これは近代の開発により、傾斜地であった場所が削平された結果と考えられる。横穴墓の開口方位のグラフからは、右岸では北東、左岸では南西方向が最多という、概ね多摩川の流路に向かっての開口が読み取れる。しかし、大田区中央部で東側斜面に多く横穴墓が存在する事実からは、地域的な選地条件の存在も考えられる。

以上の分析結果から、横穴墓分布の考察を行った。まず地質分析では、同じ多摩丘陵内でも分布に偏りが認められた。この原因には、礫が多く混じり複雑な地層を有する多摩丘陵西部が造営に適しない地質であることが想定できる。同様に、横穴墓の構造にも地質の反映が考えられる。脆弱なロームから成る武蔵野台地では撥形

(半裁徳利形)の平面形を有する横穴墓が多い一方、砂岩や泥岩から成る多摩丘陵東部では、複室や造付石棺など複雑な構造を有する横穴墓が多い。また、多摩川とその周辺の沖積地を向いて開口する横穴墓が多数であることから、耕作地および集落との景観上の関係性をもつ可能性も挙げられ、集落からの視認を想定した造営も考えられる。

横穴墓の造営に際しては、地形・地質などの自然的要因に立地や構造の制約を受ける反面、開口方向や視認性など、人為的な選地条件の存在も予想される。GISを用いた分析によって新たな視点からの横穴墓研究が可能となり、正確な造営基準の復元を行うことができる。

エジプト中王国時代の装身具利用

―出土遺物と図像資料からみた副葬品選択の一側面―

山崎 世理愛

本発表では、古代エジプトの中王国時代(前2000年〜1650年頃)に副葬品として利用された装身具を対象に、地域・社会階層による選択の違いを考察した。中王国時代は、それ以前の王権が崩壊し、混乱期を経て再統一がなされた時代である。そして、当該期には、それまで王族のみが所有できた副葬品が利用可能になるな

ど、王族以外に広く自由が認められるようになったと言われている。しかし、そのような状況下で、王族がどのように権力を維持し続けたのかはこれまで不明瞭なままであった。

中王国時代は、装身具が本格的に副葬品として利用され始め、出土遺物・図像資料の双方が豊富である。よって、副葬品の中でも、特に種類が豊富な装身具がどのように選択されていたのかを明らかにすることは、混乱期を経た国家再形成期である当該期の社会様相の描出に繋がると考えた。そこで、どのような役割を持つ装身具にどのような出土傾向があったのかを明らかにすべく、図像資料の分析によって各装身具の役割を大別し、その上で実際の出土傾向を分析した。

まず、図像資料の分析においては、木棺や女性小像、壁画に描かれた装身具を整理し、表現されたコンテキストと表現方法から、各装身具の役割を推定した。そして、それらは「現世の女性と深く関係する装身具」と「葬送儀礼に特に必要とされた装身具」という大きく二種類に分けることができた。「現世の女性と深く関係する装身具」には、ボディチェーンや二枚貝形護符付きの腰飾りなどが含まれた。一方、「葬送儀礼に特に必要とされた装身具」とは、多彩色の襟飾り、幅広腕輪、セウエレトビーズと呼ばれる短い首飾り、伝統的な装身具の「下エジプト王様式の衣装」である。

この結果をふまえ、続いて実際に副葬品として利用された装身具の出土傾向を分析した。その結果、まず実際には、図像表現よりも

多種多様なデザインの装身具が副葬されていたことが分かった。また、図像表現において、「葬送儀礼に特に必要とされた装身具」にカテゴライズされた装身具の出土傾向には、顕著な地域性と社会階層による違いがあることが判明した。襟飾りと幅広腕輪は、専ら北部地域から出土し、中でも紅玉髓やラピスラズリ、トルコ石といった準貴石や金・銀が用いられた多彩色の襟飾りは、王族に限定して副葬されていたのである。また、「下エジプト王様式の衣装」は、王族以外の木棺に装飾として描かれる場合はあっても、実際に副葬品として所有できるのは、王族に限られていた。一方、「葬送儀礼に特に必要とされた装身具」に含まれない一連ビーズ製装身具（球形ビーズや樽形ビーズを単純に連ねただけの首飾り、腕輪、足輪）は、北部・中部・南部地域いずれにおいても、最も頻繁に出土する装身具であることが分かった。さらに、襟飾りとは異なり、一連ビーズ製装身具に使われる素材は、被葬者が王族であるか否かに関わらず、準貴石や金・銀が多用され多彩色であった。また、いくつかの護符は、地域や社会階層を越えて利用されたが、それらの素材にも共通性が見て取れた。

以上より、中王国時代における装身具の選択には、地域や社会階層によって一定の制限があると考えた。J・リチャーズ (Richards) 氏は、準貴石や金・銀製の副葬品が複数遺跡の幅広い社会階層の墓から出土していることから、厳しい行政の支配を受けず、自由な経済活動を行えた人々の存在を指摘している (Richards 2005: 176)。

しかし、本発表ではリチャーズ氏の主張とは若干異なる側面が看取された。図像資料の分析で提示した「葬送儀礼に特に必要とされた装身具」の素材や所有には、地域や社会階層によって大きな違いがみられたのである。中でも、図像表現に最も類似した装身具を副葬できたのは王族であった。図像として表現されたいわば「理想型」を実際の副葬品にどれだけ反映できるかという点において、地域・社会階層によって差異が生じていたと言える。一連ビーズ製装身具や複数の護符には、地域・社会階層に関係なく準貴石や金・銀が多用されていたことから、確かに非王族にも広く自由は認められていたであろう。しかしながら実際は、その中で特定の副葬品、しかも図像表現において葬送儀礼に重要とされた副葬品に関しては、明確な差異が与えられていた。このような緩やかな統制によって、王族は権力を維持しようとしたのではないだろうか。

引用文献

Richards, J. 2005 *Society and Death in Ancient Egypt: Mortuary Landscapes of Middle Kingdom*. Cambridge.